

# 清水西遺跡

- 遺跡番号 208-158  
所在地 山形県村山市大字名取字清水西  
北緯・東経 38度51分35秒・140度37分10秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起回事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）  
調査面積 2,800 m<sup>2</sup>  
受託期間 平成24年4月6日～平成25年3月29日  
現地調査 平成24年5月23日～11月13日  
調査担当者 植松暁彦（現場責任者）・尾形知哉  
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所・山形県教育委員会  
遺跡種別 包含層・集落跡  
時代 旧石器時代・縄文時代・平安時代  
遺構 土坑・谷跡（縄文時代・平安時代）  
遺物 石器・縄文土器・土師器・須恵器（文化財認定箱数：22箱）



遺跡位置図（1：50,000）

## 調査の概要

清水西遺跡は、山形盆地北端の河島山丘陵北の、平野部から比高差約40mの小丘の山頂に立地する。今調査は、東北中央自動車道（東根～尾花沢）にかかる名取地区の発掘として、平成23年に県教育委員会の試掘調査により遺跡の存在が確認され、今年本調査を行った。

調査では、山頂部の表土が薄いことから手掘りによる表土除去を行い、調査区西・南側に古代の隠れ谷（SG1）の存在から一部重機なども用いた。その後、上層（

層上位の直上面）の遺構検出・精査に努め、縄文時代や平安時代の遺構・遺物が単発的に確認した。

次に下層の旧石器時代を調査区東側を中心に、山頂部や斜面部では深さ20～40cmの深さで石器が出土した。山頂部の石器が集中する範囲は移植ベラ、分布の薄い斜面部は角スコップなどを用いて、石器の出土層位を確認するため土層ベルトを残し掘り下げた。石器は、層位や位置を記録し、石器群のまとまりであるブロック群の成り立ちを詳細に調査した。層序は、上から順に 層が黒土の現表土、 層が黒砂（縄文・平安時代）、 層上位が黄色砂の肘折火山灰（約1万年前）、 層中・下位が黄色土（旧石器時代の火山灰等）で石器が多く出土する。

## 遺構と遺物

上層（平安時代・縄文時代）

平安時代：小土坑と谷跡などから須恵器や土師器が出土した。概ね9世紀前半（1200年前）と考えられる。

縄文時代：表土や小判型の土坑から縄文土器や石器が出土した。土器の微隆起線状の文様から、県内でも数少ない関東地方の野島式併行期の早期後葉（約6,000年前）と推測された。他に黒曜石製の石鏃や真岩製の石ベラ、一般に集落遺跡で出土する凹石が多く出土した。



写真1 調査区全景(北から。写真奥が村山平野)

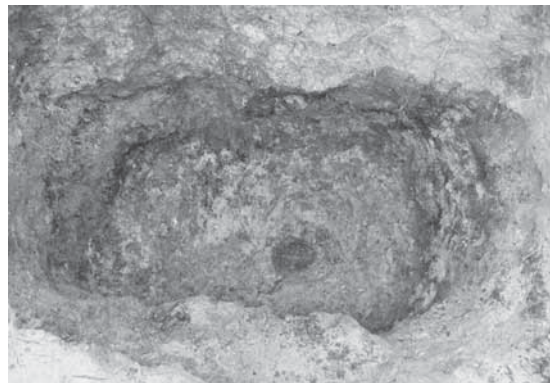


写真2 SK201土坑(落とし穴)完掘状況(南から)



写真3 出土した縄文土器



写真4 SP9ピットの須恵器杯の出土状況(南から)

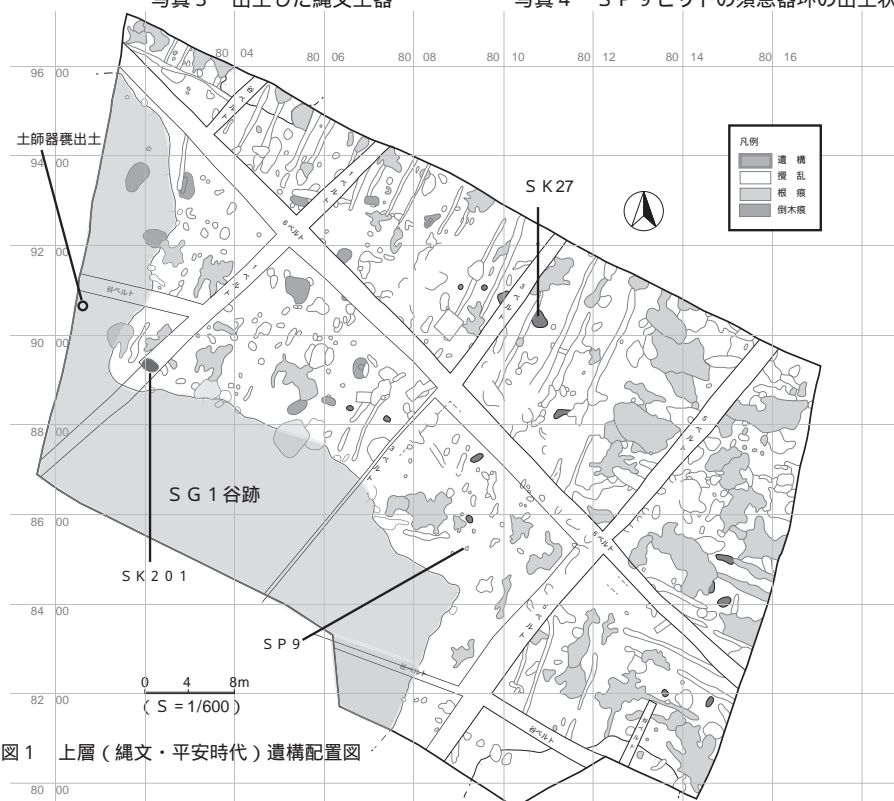


図1 上層(縄文・平安時代)遺構配置図

### 下層（旧石器時代）

旧石器時代の石器は、主に調査区東側で発見された。石器は、山頂部に直径 15 ~ 20 m の円形状の範囲で集中域があり、斜面部でも単発的に出土する。

出土層位は、層上位から出土し始め、層中位で石刃やナイフ形石器の大形の石器群が安定して出土し、層下位では剥片や碎片など小形の石器が多く出土した。

石器の石材は、県内で多く採取される頁岩が大半で、他に鉄石英や黒曜石などが若干認められる。

石器の種類は、主に狩りや加工具として使われた道具と、その道具を作る際に生じる石器のカケラである大小の剥片・碎片、その残核（石核）などがある。

道具となる石器では、表土出土ながら当該期と考えられる木材の加工用で刃部などを磨いた局部磨製石斧、切り出しナイフに似る台形石器、小形の矩形石器の端部に二次加工を施したものが少量出土した。また、縦に長く鋭い刃部をもつ石刃や、それを素材として基部に刃潰し加工を施したナイフ形石器も多数出土し、幅広厚手の形態から後期旧石器時代前半期の中でもやや新しい時期（約 3 万年前）のものと考えられる。

### まとめ

本遺跡の上層は、最も新しい平安時代（約 1,200 年前）の土坑や谷跡、縄文時代早期（約 6,000 年前）の落とし穴などが単発的に確認され、キャンプ地などに断続的に利用されていたことが分かった。

下層の旧石器時代の石器群は、県内でも数少ない後期旧石器時代でも最古段階の一群と考えられる。後期旧石器時代前半期（約 3 万 ~ 3 万 5 千年前）特有の局部磨製石斧（県内初出）台形石器、ナイフ形石器の 3 器種が、県内で初めてそろって出土した。また、今回の面的な調査により、500 点以上の石器が狭小な地形に制約を受けながらも、幾つかのまとまり（ブロック）をもって出土し、当時の石器製作などの場の利用がうかがえる。

本遺跡の南・東の眼下には、氷河時代には湿地帯や湖水だった村山平野が一望できる。ナイフ形石器や石刃など道具類やその素材が多く、石器製作にかかる剥片などが少ないという石器組成から、本遺跡は遊動生活をしてきた旧石器人の狩りの際の拠点であったと考えられる。

今回の調査により、隣県の出土資料との比較が可能となり、当該期の貴重な研究資料になるものと思われる。

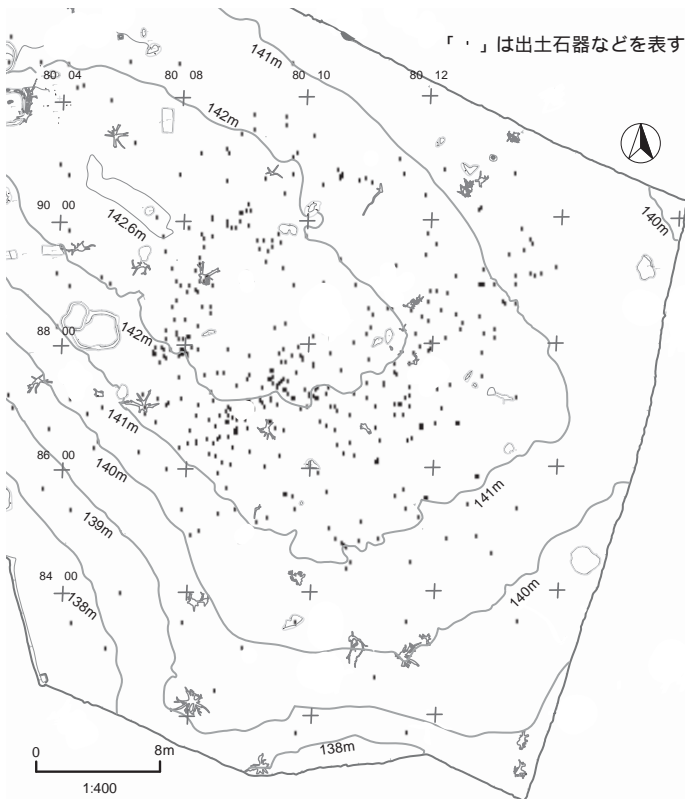


図2 下層（旧石器時代）の遺物平面図と標高等高線



写真5 ナイフ形石器の精査状況（東から）



写真6 同上出土状況と層位（東から）



写真7 下層(旧石器時代)山頂の石器出土状況(西から)



写真8 下層(旧石器時代)の精査状況(東から)



写真9 出土石器のまとめり(ブロック)状況(東から)



写真10 出土したナイフ形石器・石刃



写真11 出土した局部磨製石斧(左)と台形石器(右)